資料６：セオドア・ローズヴェルト発言（津田梅子証言）　吉川利一『津田梅子伝』1956年　津田塾同窓会　より

梅子はなおこの国を marvellous country とよび、その急速な発展に驚いている。米人は活動的で知的で進歩的であり、教育は普及し、どこもかしこも繁栄している。東部の大きな都会には、発明と骨折りの記念物がたっている。その時間や労力の節約を工夫した工場や事務所などが、また梅子の驚きであった。

ニューヨークへは、用事の度ごとに日帰りで出かけた。市の変化は予想以上で、うっかり街へも出られない。フィフス・アヴェニューなど、この前見かけた富豪の邸などは、次第に郊外へ移されて、商家がどこまでも延びて行く、かつて足を止めて見上げた二十幾層の建物も、今はオール街に軒を並べ、中には四十幾階のビルディングさえある。乗物も電車や高架線では間に合わないので、急行電車が地下鉄道を走っている。米国で育った梅子も、今は全くのおのぼりさん the country clod であった。

その夏はスカム湖畔 Squam にあるミス・ベーコンのキャンプで送った。静な湖にのぞむこの辺の景色は、殊に勝れていた。北にそびえるサンドウッチ・ドーム Sandwich Dome は湖水を隔てて南の緑の丘と相向い、遙か東南には曾て遊んだウィンネプソーキ Winnepesaukee があり、地勢は西南に開けて、湖の水はメリマック河 Merrimac R. に注いでいる。ミス・ベーコンはこの湖畔に広い土地をもっていて、毎年夏をここで過す。友人も多く誘って来る。あ





ずまや風の食堂を取りまき、そのまわりに思い思いにテントを張って、それを自分の部屋にした。日本とは違って雨は少く、蚊や羽蟲は殆どいない。気が向くと澄みきった湖に舟を浮べ、倦めば草原を散歩する。帰ると樹蔭にはったハンモックに足をのばし、鳥のさえずりを聞きながら、いつしか夢の国へはいってゆく。

九月の始めワシントンへ帰った。時の大統領ルーズヴェルト Theodor Roosevelt 1858—1919 夫妻を訪問(五)したのは、それから間もないことである。

残暑はかなりきびしかった。昼過ぎ梅子はよな子を伴い、和服でホワイト・ハウス White House を訪れた。馬車を降りると受付が「ミス・ツダですか」と声をかけて、直ちに部屋へ案内する。大統領夫人の細かい心遣いで、受付は梅子の今日の訪問を心得ていた。グリーン・ルーム Green Room へ通されて、暫く秘書と話していると、やがて夫人が現われる。純白の襟と袖とが紫紺の地色から浮かみ出て、落着きのうちに清らかな気品を見せていた。夫人はラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn やミス・ベーコンの『日本の女性』などを読んでいたので、話の緒はそこから解けて、梅子の事業や日本の教育などに進んだが、

「日本の古い文化のうち、永久に保存したいとお考えになるものは何でしょう?」と夫人が尋ねる。梅子は即座に、



「私は犠牲の精神や、君臣主従の美しい関係であろうと思います」と答えた。不意の質問にこう即答し得られる程に、梅子は伝統の武士かたぎを身につけていた。やがて夫人は、

「あいにく旅行から帰ったばかりで、少し用事が立込んでいますが、ただいまプレジデントが参ります」といって、夫人は隣室の夫を案内する。大統領は梅子が想像したよりも身の丈が低く、旅行疲れのせいであったか、見たところあまり丈夫そうにも見えなかった。あから顔で早口で、神経質らしく見受けられた。彼は日本の知人の消息などを尋ねた後で、

「日本人には感心なことが多いですね。私は四十七浪人の話を読んで感心し、娘にもそれを読むように勧めましたよ」と言いながら、先程からよな子と話していた令嬢を顧みて、

「何もかも日本に学べというのではないがねェ、忠実とか忠義とかいう、うるわしい精神は、もっと米国に欲しいものだね。日本に学ぶところはそこですよ」といった。

ルーズヴェルト夫人は梅子たちの訪問を喜んで末娘をも招いた。呼ばれて来たのは、簡単な白服を着た十五六才の娘である。大統領をかこんで一しきり談笑がつゞく。こうして楽しく客をもてなす様子は、その一ぴん一笑が世界の外交に影響を与える大政治家とも思えなかった。

一両日の後、一台の馬車がミセス・ランメン宅の前で止り、花束を持った紳士が車から降りた。梅子への使である。ばら、カーネーションなどを取交ぜた大きな花束には、ミセス・ルーズヴェルトの小さい名刺が添えてあった。





後髪をひかれる思いで、ミセス・ランメンに別れ、ニューヨークを発ったのは十月十九日である。大西洋はひどくあれたが、ジブラルタル Gibraltar を過ぎて地中海にはいると海はすっかり静まった。十一月二日ジェノア Genoa に着く。狭い坂道の両側に立並んだ、窓の小さい三四階建の見慣れない建物が、南欧の感じを深くさせた。ミラン Milan で一泊してヴェニス Venice へ向う。汽車の両がわは漫々たる水、水の都の停車場につく。駅を降りると、すぐ目の前がグランド・キャナル Grand Canal で、無数の小船が右に左に行き交うている。宿に荷物をおいて、近くのクック会社を尋ねると、思い掛けなく二人の日本人が話している。一人は紳士、一人は若い学生である。向うも目ざとくこちらを見付けて、

「日本の婦人でしょう」と学生がささやいた。こういう場所で、日本語を聞こうとは思いも寄らなかった。そのささやきを耳にした梅子も、思わず日本語で、

「そうです」

と答えて先方の二人を驚かした。学生というのは洋画家の寺崎武雄で、一二年前から絵画の研究にここへ来るとのこと、寺崎は梅子に話しかけた。

「ヴェニスには日本人は私だけです。始めてではご不自由でしょうから、私がご案内をいたし